

ミニエッセイ 「CFFマレーシアの水について」

吉野輝雄

改めて言うまでもなく、水の確保は「子どもの家」を運営し生活を営むための必須要件である。

安部さんはこの事を最初から大きな課題と考えておられた。当初は、雨水利用、井戸掘りを考えていたと聞いている。しかし、雨水は乾期の水確保には不十分で、井戸は掘るとすぐに岩盤に突き当たってしまい、湿地帯は少し掘るだけで水が湧き出てくるものの濁り水であるという問題があった。しかし、2008年頃、ジャングルの奥に湧水の流れを発見するという奇跡と言えるようなことがあった。すぐに水源地に貯水タンクを設置し、約700mの給水パイプをバンブーハウスまで引いた。これで生活水が確保でき、「子どもの家」建設の基盤ができた。また、ワークキャンプ・スタツアで訪れる人たちに必要な水の心配がなくなったのである（無論、節水をすればの話である）。

私は、現地の水問題に以前から興味があり、水源地进行を自分の足と目で確かめたいと強く願っていた。その願いは2010年に第3回社会人キャンプで現地を初めて訪れた時に実現した。安部さんに案内され、方向も分からぬままジャングルの中を歩き、岩の間を流れる水を見た時の感激は今も鮮明に覚えている。流れの上方には民家がない事を確かめて、思い切って湧水を飲んだが下痢をしなかった。命を支える青い大きな貯水タンクも愛おしく見えた。また、木々の間からもれてくる陽の光は木の枝葉に反射して輝いていた。それを見上げているとなぜか涙が出てきて胸が熱くなった。



今回、ミッチェルに案内をお願いし、加茂パパ、まっきー、それにゴードン、ジピウスと一緒に水源地去連れて行ってもらった。そこで2年前と同じ感動を味わった。再び飲んだ水は澄んでいて甘かった。何と貯水タンクが2つに増え、パイプも2本になっていた。設置するまでのロビンやスタッフの労を想った。2つ目は養魚槽に常時水を流す必要を満たすためであるという。11月は雨期であったので水量は豊かであったが、乾期の4~7月には水が不足になるかも知れないと聞き、心配になった。しかし、対策はすでに打たれていた。一つは公共水道工事を急いでもらうよう市水道局と交渉し、5月から配水されていたのだ。また、助成金により、水源地去から引いた水を養殖池近くの貯水タンクの数を増やしていた。湿地帯に作られた池には自然水で満ち、1万匹以上の魚が泳いでいる様子には驚嘆させられた。正に命の水が「子どもの家」の人々の命と環境を支えているのだ。



湿地帯に作った養殖池には水が自然に湧き出る

命を支える水源：タンクに貯め生活水と養殖水槽に使われる。